

## 運の拾い方（第1回）

2021.12.02 記す

### 1 運を拾うためには腰を屈めなければならない

①幸運は、道ばたの小石のようなもので、どこにでも転がっています。しかし、それを拾うのは簡単ではありません。「運を拾うためには 腰を屈めなければならない」からです。世間には「自分は偉い」と思っている人がはびこっています。彼らは無意識のうちに、「上から目線」で人を見ています。「どうだオレは偉いだろう」。こんなにそっくり返っていては、運を拾うことはできません。

②腰を屈めるためには、何よりも、謙虚でなければなりません。ところが、自我やプライドが邪魔して、謙虚になるのはほんとうに難しい。世間では地位や名声のある人をもてはやしますが、<sup>そとづら</sup>外面に惑わされてはなりません。世にはびこる人たちには、高慢な人が多いのが実情です。彼らはなかなか腰を屈めることができません。ですから内面は修羅の世界です。心の平安とはほど遠い世界です。

③米国第16代大統領のリンカーンは、まれに見る謙虚な人でした。鉄鋼王カーネギーは、リンカーン大統領に会って、たちまちその人柄に惚れ込みました。彼の態度は自然でいつも立派であった。誰にも親切で、思いやりがあり、けっして分け隔てをしなかった。事務所の給仕にさえも、役所の高官に話すのと同じ口調で話しかけた。彼のように、あらゆる人に平等に親しみに情を示す偉大な人物をわたしは今までに一度も見たことがない。彼は考え方のうえでも、行動のうえでも、人間の平等を深く信じていた。（『カーネギー自伝』より要約）

④リンカーンの振る舞いは表面的なものではなく、内面から滲み出たものでした。リンカーンは、生まれや貧富や学歴や職業の違いにかかわらず、人はもともと平等であると、心から思っていたのでしょう。それがおのずと言動に表れています。

⑤松下幸之助も、謙虚な人物こそ信頼するに足ると考えていました。  
謙虚な人間はけっして見境のないことをしたり、傲慢になったりはしない。

謙虚な人間は理想的な使命に注意を払い、他人のいうことに耳を傾け、正しいことをするだろう。

相手が誰であれ、いつも謙虚に何かを学べるのではないかと期待して人の話を聞いていれば、予想外の知識を得られる。

人は自分の知識だけで行動してはならないし、いつも他人のいうことに耳を傾けている人は迷わない（『幸之助論』）。

⑥「東大三冠王」といわれたF先生は「上から目線」とは全く無縁でした（三冠王とは法学部、司法試験、公務員上級職をいずれも首席合格した人を指します）。

アメリカに留学するときに、縁があつて先生に推薦状を頼みに行きました。

「それで君は何を褒めて欲しい？」とあつたらかんと尋ねるので、わたしも調子に乗って自分の長所（？）を述べました。

「じゃあそれでいいから、英文にして原稿を持ってきて。書き直して出しておくから」。案に相違してあつさり引き受けってくれました。実に軽やかなものでした。

⑦三冠王程度の成績を上げるのも、先生にとっては自然なことで、「自分が人より優れている」などという感覚はないようでした。

海外の論文を読み、研究者どうしの交流を通じて、東大ブランドも日本という狭い島国限りのローカル・ブランドに過ぎないことを肌身で知っていたのでしょう。

⑧有名大学出を鼻にかける類の人は、わたしの見るところ大学の成績が中/下位の輩が多いようです。彼らは仲間に劣等感を抱いているので、外に対しては出身大学を自慢するのです。「わたしはしたいもんなんですよ」と。

自己を肯定することは大切ですが、尊大な自尊心は有害なだけです。いつも学歴や資格を顔にぶら下げている、嫌味な人物に幸運が訪れる事はないでしょう。運も不運も、人を通じてやって来るのですから。

⑨いわゆる秀才には屈折した人が少なくありません。彼らはしばしば「自分は優秀なのに、世間はそれほど自分を認めてくれない」という不全感を抱えています。

彼らも表面上は普通の人と変わることはありません。

しかし、ふとした折に、強すぎるプライドが 権高けんかくな言葉や表情に表れます。  
オレ(ワタシ)は頭がいいんだ!

⑩30代からわたしは国際ビジネスに携わり、MBAとか経営博士とか著名なコンサルタントにも会いましたが、こういった人たちにも高慢な人が少なくないのが実情です。神経質で真面目一方の人が多く、面白みがありません。軽みがありません。

⑪腰を屈めることほど難しいことはありません。優秀な人ほど腰を屈めることができます。彼らは、無意識のうちに、上から目線で他人を見ているからです。実力にそぐわない異常なプライドを秘めているからです。

それが折々に言葉に表れます。周囲の人々を逆なでするような態度では、彼らの将来はもうそれだけで暗いでしょう。

⑫世の中は、自分ひとりの努力、才能、学歴で道を切り開くことはできません。

いくら頭がよく才能豊かな人でも、個人の力量はたかが知れています。

先輩・恩師・上司・取引先・顧客など、多くの人の引きがあつて道が開けるのです。

無数の人の支えなしに、今の自分はありません。

「今の自分があるのは、実力と努力の結果である」と思うのは傲慢です。

学歴や資格で運が拾えますか？ 道が開けますか？

謙虚な心で人に接し「運」を友としなければ、よい人生を掴み取ることはできません。

⑬日本には高慢を戒めるよいことわざがあります。

実るほど こうべ頭かぶを垂れる稲穂かな。  
稻が実を熟すほど穂が垂れ下がるように、人間も学問や徳が深まるにつれ謙虚になりますが、小人はますます尊大になることを戒めたたとえです。

## 2 運はどこにも転がっているが 多くの人は気づかない

①「運はどこにも転がっている。チャンスはみんなに開かれている」「世間には無限のチャンスがある」。これが、友人の米国人弁護士ハーリーの信念でした。

彼の言葉はとても刺激的でした。

運は人を通してやってくる。社会に出て多くの人と接すれば、必ずチャンスに出会う。

しかし、多くの人はこの法則を知らないので、運を掴むことができない。

②若いときの彼は人脈もなく、小さな個人事務所を開いていたそうです。ハーバードのような一流大学を出ていないので、大事務所には入れなかったといいます。

ある日、パーティでたまたまスニーカーの担当者と出会い、それがきっかけで小さな訴訟を頼まれました。最初の訴訟に勝ち、その後何件かの訴訟を上手く処理して、仕事ぶりが高く評価されようになりました。スニーカーの会社はやがて世界的な著名ブランドに成長し、彼は「コピー商品対策の第一人者」と呼ばれるようになりました。後に「アメリカの弁護士百人」にも選ばれ、大事務所のパートナーに招かれました。

③彼は、小さな訴訟を勝つためにどれだけ創意工夫を重ねたかを、得々とわたしに語ったことがあります。「小さな訴訟にここまでやるか」と思うような努力でした。どうやら「運が向いたら、全力で育てなければ逃げてしまう」と思っているようでした。

たしかに、運はまったくの偶然でやってくるわけではなく、それを掴むには「運が向いてきたかも知れない」と気づかなければなりません。

世間にはチャンスが埋もれていますが、それを生かすかどうかは、日頃の心がけしだいなのでしょう。「いつか大きな仕事を任せられたら力を発揮する」というのはとんでもない考え方違います。

④運は丸ごとやってくるわけではなく、道ばたの小石にしか見えません。それが幸運の種かどうかは、そのときは誰にもわかりません。やがて大きな運に育つかどうかは、本人の対応しだいです。運は長い間に育てるもので、水をやり、日光に当て、施肥をしなければなりません。

⑤わたしは彼より数才年上ですが、若いとき一緒に食事をして恥ずかしい思いをしたことあります。

コロラド州のデンバーでした。国際会議があって、ランチをとるために入ったレストランは大賑わいでした。

わたしは彼との話に夢中になっていたのですが、ウェイトレスが料理を持ってくるたびに、ハーリーは必ず彼女を見て「サンキュー」とお礼をします。

食後のコーヒーを持ってきたときには、「今日の調子はどう?」とか何とか話しかけて軽

いチャットをしています。

⑥わたしといえば、そんなことにお構いなく、彼との会話を続けていました。

給仕されるのを当たり前のように受け取り、運んでくれる彼女個人が目に入りませんでした。あたかもロボットが料理を運んでいるように、彼女をまるで人でなしのように扱っていました。血の通っている個人と見ていなかったのです。これは差別です。

後にハーリーの態度を思い出して、本当に自分が恥ずかしくなりました。

⑦ある都市銀行の支店長から妻ともどもディナーの招待を受けたことがありました。「日頃からお世話になっているので、一夕ご一緒に歓談したい」とのことです。

夕食の席は、支店長(50代)と、以前から顔見知りのお客様係のスタッフ(女性30代)の4名です。

⑧支店長とは初顔合わせでしたが、もっぱら仕がらみの話を振ってきます。

参加メンバーは4人いるのに、男どうしで仕がらみの話をするのは、日本人の悪癖です。同行した妻も、仕がらみの話に興味はありません。女性スタッフも、支店長の前でかしこまって黙ったままでです。これでは歓談の意味がありません。

⑨支店長との会話を手短に切り上げ、わたしはスタッフに話を向けました。

彼女の趣味はスクーバダイビングと聞いたのを思い出し、座間味島(沖縄)で潜った話を振りました。

しかし、一段落すると、支店長はまた仕がらみの話に戻します。

そこで今度は花の話を彼女に振りました。毎年、妻の花の写真を支店の会議室に飾っていますが、彼女はその入れ替えも担当していました。二人には格好の話題です。

⑩わたしが何度か彼女に話を振るものですから、そのうち支店長ははっと気がついたようです。

「いや大変失礼しました」みたいなことをいい、その後は趣味や生きがいなどの話で場を盛り上げるように気を使っていました。何か感ずるところがあったのだと思います。それもこれも、元はといえばハーリーから学んだことのおすそ分けです。

⑪世の中に頭がよい人はゴマンといいます。長い間ビジネスをしていると、できる人にも結構

出会いますが、こういう人と会っても、格別深い印象を受けることはまずありません。  
心に宝石を持っていないからです。

しかし、謙虚な人は別です。彼らは滅多に会えない絶滅危惧種です。ですから、深い印象を残します。

⑫いくら自分が正しくても、理屈が通っていても、それだけでは運を開くことはとてもできません。努力、才能、家柄、学歴や教養のあるなしにかかわらず、人はみな運命と偶然に翻弄されます。しかし、謙虚な人は高い確率で幸運と出会います。運は人を通してやってくるからです。他人に好意を持ってもらわなければ、道は開けません。  
運のよい人との交流を大切にし、彼らにあやかりたいものです。（続く）